

せは毎日十通近く来ます、こんなに志願者があるのに打ち棄て、置くこと云ふことは氣の毒でなりません。青年の男女が共學すると云ふことが危険であると云へば本校などでは裸體婦人をモデルに使つてゐるのに對して大きな矛盾ですから文部省當局が申請に對して認可を延引してゐるのはそんな理由ではあるまいと信じます、問ひ合せの志願者の方々には少し待つてくれと云ふ返書を出して居りますが何れ近日中には女子部を設けるとも設けぬとも明らかに通知がある筈です」と

このように、女性の入学希望者たちも本校も文部省の認可を期待していたが、政府の財政緊縮の理由を以て、本校が計上した約三万円の子部開設予算は認められず、大正十二年度も開設は見送られた。それ以後も本校は毎年要請を繰り返した。正木直彦の『十三松堂日記』第一卷（昭和四十年、中央公論美術出版）には「（大正十四年六月十日）……午後文部省會計課豫算課長一行來りて明年度の豫算に提出したる女子部設置陳列館建築に就きて余の説明を求むる所ありたり……」などという記述もあるが、何ら具体的進展は無く、翌十五年には岡田文相が高等、専門学校を直ちに女子に開放することはできないという反動的見解を示したことにより、この問題は寧ろ後退してしまつた。本校の年報の「将来施設上重要ト認ムル件」の項を見ると、「女子部新設ノ件」は昭和六年度までは引続き掲載され、同七年度からはあらためて「女子共學に関する件」として要請が行われているが、同九年度以降は全く記載されていない。その後第二次大戦末期に再びこの問題が浮上し、昭和二十一年に至つて共

学が実現する。

② 矢代幸雄の在外研究

矢代幸雄は大正四年本校の英語、西洋美術史、西洋彫刻史授業嘱託となり、同七年教授に昇格、同十年三月一日、文部省より西洋美術史研究のため満二年間、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、アメリカ合衆国における在外研究を命ぜられ、同年同月二十七日、まずイギリスへ向けて出発。その後、二度に亙る滞欧延期願い（私費）を申請してポツティチェルリの研究を遂げ、同十四年に帰国し復職した。帰国した年にはロンドンのメディチ・ソサエティから大著“*Sandro Botticelli*”が刊行され、彼の業績は西欧の学界で高く評価された。

矢代の留學と研究の意義については彼を推賞、支援した正木直彦が「プロフェツサー・ヤシロ」（『回顧七十年』昭和十二年、学校美術協会出版部）に詳しく記しているが、彼がいかに華々しい名声を担つて帰国したかは当時の新聞によつて如実に知ることができる。各紙が矢代の肖像写真入りでその榮譽を称えているなかで、例えば大正十四年二月十五日付『時事新報』などは矢代の大著出版のいきさつを紹介した上で、矢代と正木の談話を次のように紹介している。

伊太利の山に籠つて書きあげた

矢代氏語る

流感で靜養中の病床に氏を訪へば『最初はフロレンス美術全體の研究をし後に希臘に渡るのでしたがフロレンスが氣に入り少々其

處でベルナルド、ペンソンと云ふ、美術史大家に師事して居ました、ポツチエリーの研究に没頭して氏の傳記を著す氣になつたのは、歸朝する前多年世話になつた恩師が君でなければ此大著述が完成しないから、是非本にしると薦められて其氣になりました、著作中は伊太利のアテニン山に昨年一月から七月末迄立籠りました、本年は二部に分れ一部は三、四百頁の圖録で、他は三四百頁の本文で「實際は三卷」印刷は各國の見本を取り寄せ、獨逸のライプチヒ市でやるよう決めました、發行されるのは今秋十月頃でせう』

三十七歳尙ほ獨身

正木校長語る

右について正木美術學校長は『矢代君は頭の天頂から足のつまさきまで學究的である、三十七歳だが未だ獨身で七十餘歳の老母と二人暮しである、お父さんは震災でなくなつた、日本美術研究家として世界に誇つていゝ人を得たことは私共も喜ばしい、帝大英文科を出るとすぐ此方「東京美術學校」へ奉職した フロレンスで矢代君が発見したポツチエリーの小品を、日本の誰かゞ、二萬圓で買はないかと私の手許へ言つて來たので、直に嫁入先を私だけが周旋して電報で『買へ』と言つてやつたが、往便が手紙だつただけに既にアメリカの商人に買はれてしまつてゐて残念な事でした』と

矢代は帰国の三ヶ月後に「イタリー美術展に就ての希望」(一) (五) 『東京朝日新聞』大正十四年五月十二日(十六日)を寄稿した。これは

近く開催が予定されていたイタリヤ美術展にどのような作品を展示して欲しいか、あるいは展示すべきかということ論じたものであるが、そこには日本の古美術を愛するのと同様にイタリヤの千三百、千四百年代の美術を深く愛し懐かしむ氣持が横溢している。彼は、文芸復興期の最高潮の時期、すなわち豪華な千五百年代の美術およびそれ以降のイタリヤ美術は日本人の趣味とは縁遠いものであり、むしろ、それ以前の、「靜かに深くたゞへるやうな千三四百年代の藝術を日本人の魂は自分の國の甘泉のようになつかしく吸ふであらう。」と言ひ、そのような古画をこそ日本に紹介すべきであるとしてゐる。そして、特にテンペラ画と壁画を紹介することの意義を次のように述べてゐる。

特に私は古いイタリーに特有のテンペラ畫と壁畫のさびた色を我國に見たくも見せたくも思ふ。その味ばかりは、如何に精巧なる複製によつても傳へられないで、そして實は、最も傳へねばならぬ貴いものであるから、私も美術學校におけるイタリー繪畫史の講義には弱るのであつた。西洋繪畫を油畫ばかりと思つてはならない。油繪の專一なる製作は比較的近世のことである。そして又フランドルのヴン・アイク兄弟が発明したか如何か確かでないにしても、ともかくも油畫は北歐の製作である。陰影暗く、自然べう、寫に執えうなる北歐の氣分のものである。日本のやうに、日は輝き光満ちたる南歐の藝術に固有であるテンペラと云ふ技巧をどうかかう云ふ機會において、實物によつて我國に傳へたい。それは南歐の心に固有であるばかりでなく、そのしなやかなる、靜

かなるは、だ、觸りが私達にはたまらぬ程懐かしい。手軽なる油繪具は表現慾強き複雑なる近代の心理に適應して、水繪具のテンペラはイタリーにも千五百年代には押しつけられ、歐洲繪畫は一般に光澤^{ツヤ}光りするてらてらした油畫の畫面になつて了つた。水繪具のじみ沈んだは、だ、ときびとを今もなほ愛する日本人こそ、歐洲にすたれたテンペラとそれの兄弟である壁畫^{フレスコ}の技巧傳統を、あるひは少くともその氣分を正當に感受し得るものではなからうか。私は高蒔繪のやうなポチチエリの「春」^{フリン}の繪の花のかき方を見ながら、さう思つた。またビエロ、デラ、フランチェスカの繪を見ながら、これこそ古土佐の巻物の趣味上の貴族の味を大きく行つたものだと思つた。私は日本の畫かきがバリーへ行つて、印衆派^{インシュ}以後の色の多い油繪を習つて歸るばかりでなく、少しは靜かなイタリーの山の町にでもこもつて、テンペラの純ほく沈重なる味に打ち込む者があつていいと思ふ。厚板の上に丹念なる下塗りをして、そして金ばくを張り、あるひは盛上げをして、そして筆をつゝしみ愛して、せんさいにかく、かけば色は下塗りの白壺^{チヤム}に沈み込んで、しつとりと薄霞むかのやうな遠い氣持の出るテンペラ畫の古法が日本にまるで傳はつてないが故に、畫家はひたむきに油畫に赴くとも考へられるのである。

③ 長谷川路可の留学

長谷川路可(本名龍三)は大正十年三月本校日本画科卒業後直ちにヨーロッパへ私費留学。主にフレスコを学び、ベルリン中央アジア探險隊採集壁畫の模写に従事した。留学に際し、本校は「仏蘭西国

及英吉利国滞在中東洋古画ノ調査ヲ囑託」した(「大正十年職員關係書類」)。

④ 戸部隆吉死去

大正十年三月二十五日、東洋美術史授業担当助教戸部隆吉(号隆古)が死去した。仏教美術史研究に没頭し、業半ばであったため、夭折を惜しむ声が高かった。月報第二十卷第一号に追悼記事と肖像写真が掲げられており、略歴も紹介されているが、彼は洋画家になるつもりで上京して和田英作のもとに寄寓し、また、白井雨山宅にも出入りしたりして明治三十九年四月本校日本画科に入学、十四年三月卒業した。在校中は結城素明宅へ塾生同様に足繁く通い、素明を介して柴崎恒信、平子鐸嶺らと知り合い、また、素明の友人加藤咄堂が主幹をつとめる『新修養』や高島米峰らの同人雜誌『新仏教』の挿絵を描いた。本学芸術資料館には卒業制作「枇杷と露の臺」(本書第二巻口絵参照)が収蔵されており、画才も豊かであったことが想像される。卒業後暫くの間、平福百穂の下宿に寄宿し、



戸部隆吉

のちに百穂の紹介で『秋田魁新聞』その他に挿絵を寄稿した。明治四十四年七月青森県立弘前中学校教諭となり、次いで大正二年九月より同五年一月まで三重県立第三中学校教諭をつとめた後、東